

八戸酒造創業250周年特集

米、酵母 県産にこだわり



青森の地酒を追求し、1999年からコメと酵母は県産を使用することとしています。主なコメは、酒造好適米の「華吹雪」「華想い」「吟烏帽子」と、60～70年代に県内で広く作付けされていた食米「レイメイ」で、八戸近隣の農家との契約栽培です。また、青森県産業技術センターの協力の下、12年かけて開発したオリジナルの酒米が2024年に完成。「創業250周年記念ボトル」は、このコメで造りました。



「陸奥八仙」は、戦時中にできた合同会社から分離独立するための裁判のさなか、新会社を立ち上げ、1998年に発売した新銘柄です。ブランド名の由来は、8人の仙人が登場する中国の故事「酔八仙」から。「酒仙の境地で酒を楽しんでほしい」との思いや、八戸の「八」が含まれることに加え、立ち上げた現蔵元の駒井庄三郎が8代目であることが決め手でした。無名で出発した銘柄は、四半世紀で青森を代表する酒の一つに成長しました。



代々の酒 品質磨き受け継ぐ

全国に男山を冠した日本酒はいくつもありますが、「陸奥男山」は1910年、他の男山ブランドに先駆け、5代目によって商標登録がされました。地元の漁師たちに昔から愛されてきた辛口酒ですが、8代目が品質をさらに磨き、全国新酒鑑評会において89年から5年連続で「金賞」を受賞しました。代々の蔵元が心を込めて育ててきた酒を、これからも大切に受け継いでまいります。

2021(令和3)年12月	2010(平成22)年9月	2010(平成22)年6月	2009(平成21)年10月	1999(平成11)年6月	1997(平成9)年10月	1995(平成7)年	1991(昭和46)年6月	1944(昭和19)年10月
---------------	---------------	---------------	----------------	---------------	---------------	------------	---------------	----------------



世界酒蔵ランキングで1位に選ばれる

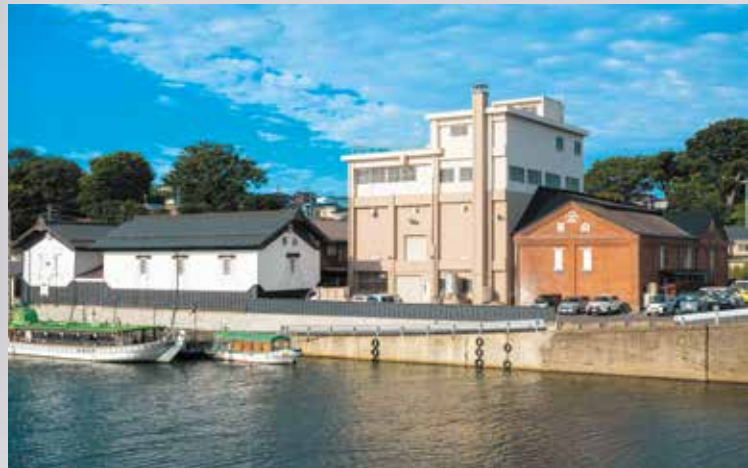
醸造施設(土蔵3棟、木造主屋1棟)れんが蔵1棟、れんが塀が青森県初の景観重要建造物に指定
同施設が国の登録有形文化財に指定される

新生八戸酒造 思い託した銘柄



蔵の発展、 湊町と共に

明治期に湊町に酒蔵を移転してから137年。以降、蔵は町の繁栄と共に発展してきました。地酒は地元の人に親しんでもらってこそ一との考えから、「湊橋八戸小唄まつり」や氏神・大祐神社の「風鎮祭」など、地元行事に率先して携わっています。また、関連企業のまちづくり会社「みちのくみなと未来」は、J R陸奥湊駅前のにぎわい創出に向けた再開発事業を進めています。新たな集客施設は2026年末の開業を目指しており、一部は今年11月に先行オープン予定です。



近江商人の初代駒井庄三郎が、陸奥の地で酒造りを始めたのが1775(安永4)年。八戸市湊町にある蔵元・八戸酒造は、幾多の転機を乗り越え、今年で創業250年を迎えました。青森県産の原材料にこだわった本物の「陸奥の地の酒」を醸しながら、これからも挑戦を続けてまいります。

沿革

初代 剣吉に「こうじ屋」を開業。村市剣吉にて酒造業開始
4代目 湊村濱通りの加藤徳次郎酒造場を譲り受け移転
5代目 「陸奥男山」を商標登録し「男山」の付く全国で最初の商標となる



1932(昭和7)年ごろの駒井酒造店



八戸酒造が展開する新ジャンル商品の一部。右から、
「MINATO DISTILLERY オークCASK」
「MINATO DISTILLERY 粕取りウオッカ」
「AOMORI JUICY LAB -リンゴ-」「AOMORI JUICY LAB -洋ナシ-」
「青森ヒバCASK-Char-」「八仙Bonsurb ヨーグルトリキュール」
「MINATO DISTILLERY 山椒スピリッツ」



新ジャンルに挑戦 地域に根ざした 総合酒類メーカーへ

八戸酒造は2010年代から、若者や女性といった日本酒をあまり飲まない層をターゲットにしたアイテムを増やそうと、日本酒以外の新たなジャンルの酒造りにも挑戦してきました。現在、掲げる最大の目標は、「地域に根ざした総合酒類メーカー」への進化です。

これまでビール酵母やワイン酵母で仕込んだ日本酒をはじめ、リキュール、焼酎、スピリッツ、発泡酒、果実酒などを商品化。ホップやリンゴ、ゼネラルレクラークといった地元農産物を活用した商品もあります。

250年の伝統を重んじながらも、企業としてのさらなる飛躍を期しています。

中でも人気が高いのは、むつ市の農畜産物加工業「斗南丘牧場」のヨーグルトを使った限定出荷の「八仙Bonsurb（ボンサーブ）ヨーグルトリキュール」。果

汁フレーバーのバージョンは早々に売り切れになります。

若手蔵人がオリジナルの酒を考案する「Mixseed Series（ミクスード・シリーズ）」も展開。蔵人の平均年齢は36・3歳と若く、技術や独自性・創造性の向上につなげています。

「日本酒メーカーとしては、一つの形が出来たと思っています」と、8代目駒井庄三郎。近く、新たな工場整備に着手する予定で、数年後を視野に総合酒類メーカーとして本格的に始動する計画です。

Top Interview

“創造と革新、未来につなぐ”

8代目 駒井 庄三郎



専務取締役 駒井 秀介
代表取締役 8代目 駒井 庄三郎
常務取締役・製造責任者 駒井 伸介

8代目としての私の最大の使命は、酒造りを継承し、発展させていくことだと考えてきました。企業を発展させ、未来につなぐには、「創造と革新」が欠かせません。

現在の八戸酒造は合同会社から分離独立して新設した会社であり、ゼロからのスタートでした。新銘柄「陸奥八仙」の酒質向上に努め、展開するアイテムも増やしてきました。

蔵に親しみを持ってもらうため、実際に酒造りの様子を見てもらったり、見学や、酒米作りを体験する「がん

じゃ自然酒倶楽部」（現「八仙サポータークラブ『With8000』」）といった取り組みも行ってきました。

八仙誕生から27年がたち、日本酒メーカーの一つの形が出来たと思います。今後は日本酒だけでなく、さまざまなジャンルの酒を本格的に扱う「総合酒類メーカー」へと展開を図りたいと考えています。

日本酒文化を守りつつ、海外に広めていく必要もあります。国内の日本酒消費量が減少していく中、地元以外の顧客を獲得していかなければなりません。また、地元企業として事業を発展させていくことは、地域の雇用、経済の発展に貢献するものと考えています。

HASSEN to the World

世界が認めた酒蔵 日本酒文化を発信



「陸奥八仙」「陸奥男山」は、海外でも高い評価を得ています。国内外で開催される日本酒コンテストの入賞実績をポイント化して集計した、世界酒蔵ランキング。八戸酒造は2019年のランキング開始以降、常に10位以内に入り、21年には、北東北では唯一となる1位を獲得しています。

特に八仙は、フルーティーで華やかな香りとフレッシュなうまみが受け入れられています。受

賞が多いのは、華やかな香りが広がる「赤ラベル」や「華想い40」、うまみと酸が調和した「黒ラベル」。ブランド設立当初からある「特別純米」も定評があり、いずれも地元で親しまれる定番酒です。

現在、東南アジアや米国、欧州の約30カ国に輸出しています。今後も世界に販路を拡大しながら、伝統の日本酒文化と、青森・八戸を発信してまいります。

